
愛しさも、切なさも。

如月らむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しさも、切なさも。

【Nコード】

N6181Y

【作者名】

如月らむ

【あらすじ】

ある夜偶然に出逢ったのは、長年の海外勤務から帰国した男の人
Ⅱ「兄」。気づいた時には既に立っていた禁断のフラグ。誰にも言えないオフィスラブ、決して赦されない 愛しくも切ない大人兄妹・極上の禁断 Love Story。他サイト様にて執筆した作品【愛しさシリーズ<運命編> 改訂・完全版】内容・描写にかなり差がありますので、こちらをお読みする事をお勧めします。濃いめの禁忌ベッドsceneを多く含みます。

Introduction (前書き)

章ごとに設けられた、みゆとアキの呼び掛けIntroduction。
on。

これらはいずれも物語後半のあるトキのものです。
ぜひ、お気に留めながら読み進めてみて下さい。

Introduction

——ねえ、アキ 覚えてる？

13年ぶりに偶然再会したのが この場所だったよね

アキも 私も お互いの事全然気づいてなくて
血の繋がりもない「他人」 みたいだったっけ

笑っちゃうよね。

あれから季節は変わりゆくのに
私の心はずっと、ここに。立ち止まったままだよ…。

私たちの運命は やっぱり どうしても 変えられないものだった
のかな？
「愛しさ」とは永遠に、「切なさ」を越えられないものなのかな…

ねえ、アキ？

できることなら ———— もう一度。
それが叶うなら ———— 何度でも。

あなたに、出逢いたい…

” あなたと出逢えたことが運命ならば きつと。

この愛は——永遠になる”

…出逢え、ますように——

*
*
*
*
*
*
*
*

Introduction (後書き)

現在公開している『愛しさも、切なさも。』とは
内容が異なる箇所があり、新たなエピソードが加わっています。
また性描写においては、より濃いめになる予定です。

#1 運命のイタズラ - ? -

side みゆ

あなたとの出逢いまで、アト…1、2、3歩。――ドンッ！！

『――あつ、ごめんなさ…！』

――「こは、新宿のビル街。

残業からようやく解放され、クタクタな足を引き摺り新宿駅までの道のりをフラフラと歩いていた時のこと。

これはただの私の不注意？それとも誰かのイタズラだったのかな？今私は、見知らぬ人の胸の中に真正面から頭を突っ込んでいたりしているワケで。

けれど早く離れなきゃ、きちんとお辞儀をして謝らなきゃ、といくら頭で常識を反芻しても、思うように体が動いてくれない。クラクラする

「…また随分と凄いぶつかり方だな、前見てんのかよ…」

そんな 人様に大迷惑をお掛けしている私こと

桜木 みゆ（23歳）は、社会人2年目の言わばOL。

と言っても、勤め先・一流化粧品メーカー・プール・マシエリ>の経営者はお父さんで

その娘の私は一般的に「社長令嬢」って呼ばれるみたいだけれど。

その大企業の社長令嬢がなぜOLをしているのか…不思議だよね、私もそう思う。

でもこれはお父さんとお母さんの願いでもあるの。

” みゆだけは家柄のシガラミに囚われず、極普通の女性として育ってゆきなさい”

” 決して傲ることなく 普通の生活を、自由な恋愛を、ごくありふれた幸せを”

「——何やってんだよ いつまでそうしてる気？」

…そうして数秒経たないうちにも

ガクガク震える足、ズルズルと崩れゆく視界、ゆらり遠のく意識――

軽く目眩を起こしている私に、彼の苛立ちを気遣っている余裕なんて勿論なく

目に映るものを追いかけるだけで精一杯だった。

…あ、洗い立ての匂い香る白いシャツ！良質のスーツ？ネクタイ、ベル、ト

「…あのな、！？……どうした？」

——そのまま私は軽い貧血を起こしたらしく、数分気を失っていた様子で

気づけば初めて会った男の人のワイシャツをシワクチャになるほど握り締めていた。

私、ずっとこの人に体を支えられてたの――？

スーツのその上を見上げてみれば

力強そうな腕、懐かしさに似た暖かさを感じる胸板、定間隔で響く「おい」の呼低音

この抑揚のない響きに焦ってサッと見上げた先には、薄暗闇に光る……切れ長の瞳

私を下に下に見下ろすその瞳は、温かみの欠片なく鋭く尖っていてその瞳を引き立てるのはシャープな顎と、スッと通った鼻筋キリリと勇ましい眉毛

そのパーフェクトな美形顔に胸の鼓動がドクンと一打ちした時心までもが驚掴みにされてしまう。

——ねえ、一目惚れって、信じる？

その人を見ているだけで、呪文にでもかけられたみたいに体は固まってる。

それでも体の芯から訴えかける鼓動はずっと加速し続けていて。

思わず手を当てた胸の鼓動が彼に届きそうな位……心が大きく、大きく——揺れ動く。

「気分が悪いなら医者にでも診てもらうといい。俺は御免だ」

なのに、トキメキ初体験も虚しく

彼は気だるそうに目線を外し、不機嫌な顔つきでギリッと睨みつけるの。

背筋も凍るその冷たい声で。素っ気ない言葉を春風に散らして。

だから体の弱ってる私に返事をする暇も与えず

何事もなかったようにクルリと背を向けて歩き出す彼に——
然、呆然。

え、ちよつと、感じ悪くない？

私だつて迷惑かけて悪かつたとは思つてるけど、でも！
もうちよつと人的な何かがあつてもよかつたと思う！！

ちよ、ちよつと男前だからつて気取っちゃつて。

久しぶりのイケメンに奪われたこのドキドキどうしてくれるの？
貴重な乙女心、返して欲しいつ。

ねえ、返してよ……。

細めの体つきにスラーツと伸びた背丈

少し耳にかかる位のサラサラしていそうな漆黒の髪

彼が 遠のいていく…。

何も語らない背中自信に満ち溢れた姿勢

後ろ姿にさえ心を奪われるなんて私、どうかしちゃつてる。

もしも彼が心優しい人だったら

ここから恋が生まれてもおかしくないハプニングだったのに
蓋を開けてみればただの冷血様。

なんて夢みたいなことを思い巡らせていると

何かを思い立つたように急に振り返る彼

——私を、見て、る…？

またあの突き放した口調で何か言われるのかな？それはそれで、怖
い…。

そう私がオドオドとしている合間にも

コツコツと靴の音を鳴らして一直線に私へと歩み寄る彼の音

その歩み寄る一步一步にどうしようもなく鼓動を乱されて
高鳴る胸に手をグツと強く押し付けた。

だってそうでもしないと、この心臓ごと 心ごと。

思わず、恋を。してしまいそうになるから――。

息のかかる距離に来ていた彼ら放たれた、目が眩む程の鋭い視線
その無言の威圧感にもグラグラと心が揺さぶられていく。

「背中に視線感じたんだけど?――何?」

私の目の前を通り過ぎていく彼の遅く、綺麗な指先が
迷うことなく長く伸びた私の一束の髪を持っていくことで、言葉ま
で奪われる。

「少し触れただけで期待して 本当分かりやすい女だな……」

お願い そんな風に見つめないで?冷たくしておいてそんなに優しく
触れないで。

私の全てを、持っていけないで…。

けれど腰を少し屈めた彼は、身動きの取れない私を見て最後に
…悪戯に。ただほくそ笑んだ。

「――欲しいならくれてやるよ」

掴まれた髪の毛を軽く引つ張られると

その先に待っていたのは、肌と肌で感じるあなたの…温もり。

――それは、突然のこと。

——これは、偶然のこと。

——「偶然」と言う名の「必然」に変わる時。

私の唇は今さつき会ったばかりの男の人の温かな唇に——包まれていた

「他人」として初めて出逢った、あなたの唇に——。

フワツと離れた彼の唇を思わず目で追ってしまう。

挨拶代わりって言ってもいい位さり気なくて

それでいて熱い何かを刻み込まれる、この感覚…

ねえ、今の。何のキス——？

突然のハプニングとキスをしてしまった恥ずかしさに煽られ続ける

…胸の鼓動

この状況を把握しきれないのに、戸惑いと欲望がみるみるうちに膨らんでいく。

瞳がぶつかり合うだけで羞恥心を丸裸にされて

それでも更なる甘い香りを感じ取って反らせない視線

私の心をまるごとさらってしまうズルい眼差し

でも唇まで奪うなんて、反則…。もっともっと。欲しくなる——

「そんな瞳で俺を見つめてんな」

——そんな、目？

考えてる暇も与えてくれない彼にグイッと強く顎を引き寄せられて

今度は唇にカブリつくように力強く、欲望のままに。奪われる

「もっと奥まで欲しいんだろ？」

浮いた唇から漏れ彼の強気な吐息、煽られる　甘い願望

『…んっあ、ちよ、んう——っ』

「…えろい顔……」

2人の唇が潤って、私の心の中を覗き見るように奥深くまで入ってきて

直接脳を刺激されるから頭の中をカラッポにさせられるなんてきつとこの人　キス、すごく巧いんだ…

こんなに夢中にさせるキスをするなんてほんと、反則だよ——。

強引に奪っておきながらも、頬を包むのは優しい彼の手

壊れる程胸打つ鼓動をもみ消す吐息に紛れた私の甘い鳴き声

ビル街のど真ん中で何度も何度も重ね合う唇

私は、熱く。深く。あなたに、奪われる——

「……お前、隙だらけだな。よく痴漢に遭うタイプだろ…気を付けるよ？」

『えっ　あの…!?!?』

「どうせ此処の社員だろ?…運が良ければまた相手してやるよ」

けれどそのヒトトキは、夢のように儚くて

彼は傲慢さたつぷりの一言を残し、何もなかった素振り立ち去っていく。

せめて名前と携帯番号位聞くべきだったんだろうけど
現実かも分からないフワフワした気持ちでお腹一杯でそんな余裕は
全く無くて
初めて暴かれた甘い欲望を抱えたまま、私はしばらくその場所から
動けずにいた。

――全ては、ここから始まったの

ほんの僅かな出来事、衝撃の走る出会い
イタズラな運命が落としていったもの。それは
――禁断のフラグ。

――次の日迎えたいつもの朝

ベッドから起き上がって支度を済ませダイニングチェアに腰を下ろ
すと

テーブルの上にはいつもの様に、和の朝食が用意されていたのだけ
れど

食べて欲しそうな紅鮭を食い入るように見つめながら考えてしまう。

昨日は冷静に考えなかったけど

初めて会った人と？しかも思い切り街中で？キスしまくっちゃった
んだ！

今思うと、ありえないよねえ…

一夜明けてしまうと、あれは夢だったんじゃないかって気もする

それでも、今でも唇がじんじんと訴える…真実味帯びたアツい熱

私もどうかしてただけど、未だにあのキスの意味が理解できずにいる…。

つき合いましたよ！って感じでも無かったし、これからって感じでもないよね…

たとえ同じ会社の社員でもウチは自社ビルを持つ程の大企業、もう会えないだろうし。

でも、「わかりやすい女」ってどうゆう意味だったんだろう？

「みゆ、早く食べなさい！遅刻したらすぐお父さんにばれちゃうわよー？」

そんな答えの拾えない疑問を吹き飛ばしたのは、お母さんで。

お父さんが社長を務める会社だからって社会に甘えは通用しないとよく言い聞かされるの。

ちなみに私の勤める部署は、新しいプロジェクトを任されている企画開発部

うちの家系はみーんな大学卒業と共にお父さんの会社に入る事になっていた。

「タカも昇進したし、みゆも社会人として働くまでに立派に成長してくれたし

お母さん、一安心よ」

…タカにいは桜木家の長男（31歳）

お父さんは昔から仕事ばかりで、私にとって小さい頃からタカにいがお父さん代わりで

長男だから時期後継者・今ではもう専務なの。

「アキも向こうで頑張っているのかしらね…」

…そしてアキは桜木家の次男（28歳）

アキとは年が5コも離れてるけど、私が昔ブラコンて呼ばれた程仲がよかった。

頑張ってる仕事しているのだろうけど、アキ、元気してるのかな

「アキ、ロス支社にいるんだっけ？」

中学卒業と同時に留学してそのまま支社に入社しちゃったもんね

…」

「そうよねえ。たまには帰って来てくれればいいのに…」

アキは留学してから13年間一度も家に帰ってきてない、たまーにメールが来る位。

顔見せに位帰って来ればいいのに 相変わらず冷たいんだ…

そうしてお母さんも私もそれぞれ思いふけていたら…、わ！！？？

「——みゆ！時間！！」

「あつ——行つて来ます！！！」

昨夜のことに浸る間もなく、ひたすら走り駆け抜ける新宿ビル街
滑り込みセーフで何とか辿り着いた、私のオフィス

「絵里花、奈緒、おはよー！」

この職場、企画開発部には私と同期の女の子が2人いて。

流行り物が好きでまさに合コン受けしそうな

かわいらしい木村きむら 絵里花えりか

絵里花よく色々な部の人達との合コン話を持って来るから社内では「合コンの女王」とも呼ばれている。

「ねえみゆ？つ今度広報部と飲む約束したからあゝ奈緒と3人で行こうねえ」

そして絵里花の甘ったるい口調に乗った誘いを向かいのデスクからスパッと断ったのが

高級ブランド物好き、まさにおじさま受けしそうなお姉キャラの岩崎いわさき 奈緒

「絵里花の人脈網ってどこまで広いの？」

私は若い（男）パスだから。あゝみゆは行ってくてよ？？」

「奈緒！私まだ行くなんて…」

絵里花の用意してくれる合コンはいつもいい人揃い。

入社以来彼氏のできない私にはとても嬉しいお誘いんだけど

「わあゝい！今回も頑張ろうっ」みゆってキレーなのに男っ気ゼロなんだもん。

そのJK並の恋愛思考、変えた方がいいと思うなあゝ」

相変わらずその可愛いブリッコ口調でスケスケ心に釘を刺すものだから

毎回快くお返事ができずにいたりする。

付き合った人がいてもいつも、本当にこの人の事が好きなのかな？
って考えちゃって

結局すぐ別れちゃうんだよね…

過去のトラウマってなかなか消えてくれない　　本気になるのが、
怖い――。

…その時なぜかフと思い浮かんだのは、昨日の彼。

もしまた会える距離にいたら、トラウマも吹き飛ぶ位好きになれる
のかな？

彼のあの私を見る目も、キスも　思い出すだけで体が熱くなる…。
あんな風に瞬間的に男の人に惹かれた事は初めてだったから
いつも私は自分の気持ちに自信が持てなかったから…

その点、絵里花は恋愛に素直な性格をしていた。

惚れっぽい上に好きになると真っ直ぐで、あつと言う間にのめり込
んでゆく…

その怖いもの知らずな所がちょっぴり、羨ましい。

ちなみに、奈緒も彼氏がいるみたいだけど

奈緒はあまり自分の事を私達に話してくれない。何か深いワケでも
あるのかも…。

――そんな、雰囲気も性格も全く違う3人だけど

私たちは入社した時から休みの日も遊びに行くような仲の良い友達
だった。

そして、雑談に終止符を打ちに訪れたのは就業時間

今日は、私が入社して丁度1年が経った日

この企画開発部に人事部の人が入ってきては、新入社員の紹介をしている。

「さあ来なさい。えー今日から開発部に配属された沢田さわだ 亮介りょうすけ君だ」

…へーえ。格好いい顔しちゃってるわー。となると…絵里花を見ると案の定

「木村絵里花でえす！ジャニーズ系だよね沢田くんてえ♪彼女とかいないのぉ？」

やつぱりー！席に座った沢田くん早速絵里花が絡み着いていた。

「今いないっスねー」

「ええ？。もったいないい！かつこいいのにい」

そこですかさず奈緒が絵里花にツッコミを入れ

「いい男見るとすぐそうやって興味津々にがつつくのやめなさいよ、見つとも無い…」

けれど絵里花は動じずに、自慢げに言い放ってみせるから

「だってえ、いつどこに彼氏候補が転がってるか分からないじゃあ
ん。

積極的にいかないと損ソッ」

その前向きすぎる絵里花に奈緒と私が呆れた顔をしていると

少し照れながらも、沢田君がキラキラした目でこんなことを言うから

「俺は、その人以外見えない位の完全燃焼できる相手が欲しいんスよね」

急に何を言い出すのと思ったけど 何か、かつこいい——と私達3人とも一瞬そんなクサイセリフを堂々と言う沢田君に魅せられてしまった。

——時だった。

「……えゝもう一人、紹介します」

え？まだいたの新入社員 てゆうかまだいたの人事部の人
そうしてみんながどよめく中、人事部の人は気分よく話し始める。

「この1年、開発部の主任は不在としていましたが
海外勤務を終えられて本日付けで正式に就任されました」

主任がそろそろ来るとは聞いてたけど、私達の直属の上司かあ。
どんな人なのかな？

「——失礼します。」

そう期待を胸にドアに向ける視線
そして入ってきた背の高い男の人の姿に一瞬で目が釘付けにされる。

——え——。……うそ——。昨日の、人……

新主任として紹介されて現れたのは
昨日、街中で熱烈なキスをしたあの彼。

覚えてる 何にも動じないあの瞳

キスをしている時でさえ乱れない自信に満ちたあの姿勢

2度でも偶然が重なれば、運命って呼べるのかな？

妄想に更け出したら、もう人事部の人の話も耳に入らない。

「この方は、暫く海外勤務されていて――」

昨日は暗くてハッキリとは見えなかったってゆうのもあるけど
こう見ると こんなにキレイな顔した人だったんだ
なんて私がポーツと彼を見つめていると

「ちよかつこいい！あの人お」

イケメンアンテナだけは鋭い！

またもや絵里花がすかさず強力ながつつきを見せるものだから

あの人だけはヤメてーっ！！

そう心の中で叫びながらまた彼を見ると、視線が会っ…

なのに彼は私の姿に驚いた様子もなく顔色一つ変えずに平然と私を
見ている

ジッと あの切れ長の目で私の目を射抜くかの様に…。

昨日の今日で私を覚えてないってことは無いと思うけど
何でそんな冷静な瞳でいれるの…それが余計私の心をざわめかせて
いった。

——それもすぐに、違うざわめきに変わるのに

「——という訳で今日から主任の桜木 アキ君だ。宜しく頼むよ」

『ま、って…桜木…アキ——？』

「桜木って、もしかして みゆのお兄さんとか？………みゆ？？」

呟いた小さな声は震え出し

奈緒の声だって、今の私の耳には届くはずもない。

昨日の人が、アキ——？うそ、でしょう…？

あまりに予想外の事実には私はすぐに状況を飲み込む事ができずに
みるみるうちに視界が狭まっていく

「…大丈夫？みゆ顔真つ青だよ？」

『うん ちよつと、驚いただけ…』

奈緒が心配そうに私の顔を覗き込んで顔色を伺うものだから
一応の口を動かしてみても、思考の歯車が巧く噛み合わない。

昨日の彼はアキで 今あそこにいるのもアキで…

私、アキに恋に堕ちそうになってたの ？お兄ちゃんの、アキに——
し？

そういえば何となく面影が…。

それよりも何よりも お兄ちゃんとキス——っ

アキが帰って来た事は嬉しい事のはずなのにものすごく、複雑な気分…。

出会って恋に落ちそうになってキスまでしちゃって運命の再会をして

実は兄でした……なんて失恋にも程があるよ。

「——と言う事で、桜木 みゆ君。

兄妹でやりづらい事もあるだろうが仕事に励んでくれよ」

『は、はい！』

ええ、やりづらいですとも……

やりづらさマックスだよ。

「——宜しく？」桜木」

さつきと変わらずに私を貫く何も語らないアキのブレない視線
驚く様子もなく毅然と立っているその冷静さ。

その力才は、昨夜の「男」でもなく「兄」でもなく……紛れもなく「上司」

アキは 驚いてないの？それとも、知ってたの……？

私は兄妹と知った今でも胸は締め付けられたまま——ドキドキが、消えないよ。

……それでも。

絶望的な失恋の切なさのアキとの関係の気まずさが喉元をカラカラにさせても。

私は喉の奥から一生懸命言葉を発した。

『——よろしく お願いします主任……』

#1 運命のイタズラ - ? - (後書き)

修正ガツガツかけますー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181y/>

愛しさも、切なさも。

2011年11月20日23時33分発行